

# 郷

こうる

# 流

第55号 2008年5月1日発行



本山・御影堂門前の噴水

## 2008年 西光寺行事日程

4月19日(土) 西光寺 聞法会(正信偈のお勤め、輪読と語り合い) 3時~5時  
5時からは場所を変えてお酒を飲みながらの語り合いです。

5月18日(第三日曜) 西光寺 永代経 11時半より 法話 本多雅人先生(亀有・蓮光寺 住職) ※法話後、お参りの方々とお斎(食事)をいただきます。

5月31日(土) 御遠忌お待ち受け大会(同朋大会) 日比谷公会堂 1時~4時  
※ 希望者にチケットを差し上げます。

6月21日(土) 西光寺 聞法会(正信偈のお勤め、輪読と語り合い) 3時~5時  
5時からは場所を変えてお酒を飲みながらの語り合いです。

6月24日(火) 東京二組同朋総会 2時~5時 会場 西光寺

7月12日(土) 新盆合同法要(新盆対象者) 11時~12時

7月13日(日)~16日 盂蘭盆会

8月16日(土) 西光寺 聞法会(正信偈のお勤め、輪読と語り合い) 3時~5時  
5時からは場所を変えてお酒を飲みながらの語り合いです。

9月6日(土) 東京二組門徒会総会・研修会 2時~5時(懇親会有) 会場 蓮光寺

9月20日(土)~9月26日(金) 秋のお彼岸  
※ 9月23日(秋分の日) 春のお彼岸合同法要 11時より 法話 住職

10月18日(土) 西光寺 聞法会(正信偈のお勤め、輪読と語り合い) 3時~5時  
5時からは場所を変えてお酒を飲みながらの語り合いです。

11月3日(文化の日) 西光寺 報恩講 11時~  
※ 創建400年記念法要を兼ねる予定です

12月20日(土) 西光寺 聞法会(正信偈のお勤め、輪読と語り合い) 3時~5時  
5時からは場所を変えてお酒を飲みながらの語り合いです。

# 西光寺 永代経

5月18日(日)午前11時30分より

西光寺にご縁のあるすべての方のご法要です。どなたもぜひご参詣ください。大切な人の死を受け止め、死すべき自らのいのちを見つめなおすことが法要の大きな意味です。

「私は、父が思いもかけな

い事故で亡くなつて、どんなに無念であったかと思うといたたまれず、毎年父の供養のため、この追悼登山に参加してきました。しかし、今年初めて、その自分の思いが大きな間違いであることに気づかされました。それは、このことを縁として、生きるということの意味を考え、みんなと力を合わせて生きてくると、この私が父から呼びかけられていたことが供養だった、ということでした」

この言葉に深い感動を覚えました。

むしろ供養を受けねばならないのは生きていく私のほうではないでしょうか。

どうすることが真実の供養かということとを問い、明らかにしていくのが浄土真宗なのです。ご一緒に聞かせていただきますしょう。

## 【法要日程】

十一時半 勤行

伽陀 阿弥陀経 念仏讃

正信偈 同朋奉讃

十二時 法話

本多雅人先生

一時 お齋(昼食)

※ 法要後、毎年皆さんに喜ばれている、おいしいお寿司を、いっしょにいただきます。

## 修正会を勤めました

一月一日（火）午前十一時から、ご案内の通り、恒例の修正会（しゅうじょうえ）が厳修されました。

真宗の門徒の初詣は、手次ぎのお寺で本願念仏の教えを聞くことから始めたものです。それは自分の都合をお願いする世間一般の初詣とは違い、教えに照らされて、都合のよいことが幸福なのだと思われている、私たちの思いを破ってください。さる教えを聞いてきたのでした。

私たちの人生は「思いがけない」ことの連続であり、「思いもよらない」ことだらけではありませんか。このような年にしたいと念じても思うようになった年などなかったのではありませんか？

自分にとって都合のよいことばかり追い求めて、自分の思い通りにするために仏様に頼るのが宗教で

はないということをつなずき、親鸞聖人の教えから、どんな自分であっても、それを引き受け生きていく智慧と勇気をいただいでいく新年の集いです。

### 《修正会 住職法話》

『響流』第五四号に「善人と悪人」ということを書きましたのでそこから少し話を進めてみたいと思います。

去年の「漢字一字」は「偽」でしたね。あの事件を起こした人たちはすべて「善人」です。多少の良心の痛みは感じているでしょうが、私だけではないし、きれいな事だけじゃ生きていけない、従業員に給料も出さなきゃならないから、利益を上げなければならぬ「これくらいはしかたない」と考えている人たちです。

つまり、自分は正しいと思っている人なのです。金子大栄先生は「現代人は善人ばかりである。他を平気でこき下ろせるのは、善人でなければできない芸当だ」

と仰せられました。

昨今、いままで持ち上げていたことが、何かのきっかけで急にバッシングされることが多くなりましたね。ボクサーや横綱、総理大臣等々でサンプルはたくさんあります。「応援していたのに裏切られた、傷ついた」というものです。善人は「被害者意識の人」です。

きっかけがあると、仕返しに牙をむくのです。犯罪は「善人」が引き起こしているのです。自分はいつでも被害を受けていると感じている人が増えているのではないのでしょうか。

まだ子どもが小さい頃「ひらけポンキツキ」という番組を見ていましたが、その中に大竹しのぶが歌う『棚上げ音頭』という歌がありました。〃自分のことは♪棚にあげー♪〃というサビが印象的でした。

また、だれかの落語に、その主人が先祖伝来の壺かなにかを誤って割ってしまったのですが「壺が割れた」というだけ

でした。

ところが丁稚が茶碗を落としてしまうと「誰が割った!」と犯人捜しです(笑) 自分の時は無罪ですが、丁稚(自分以外)のときは許せないので。安田理深先生のお宅が隣家のもらい火で消失したことがあり、先生は生活費もすべて本にされるくらいだったので、焼け残った本はなにかと毎日焼け跡を探し回ったそうです。そのときは「家を焼かれた」という思いでいっぱい隣を許せなかったが、ふと気づくと隣も焼けうちも「焼けた」という事実しかないのだと頷いていかれたということ。

「善人とは暗い人、悪人とは明るい人であります」と曾我量深先生はおっしゃいました。善人の家庭はみんな自分が善いからです、相手の悪を裁くのです。善人は自分だけが罪のない善人だと思ってしまうからまわりはすべて悪人に見えていくのです。善悪のけじめを自分でつけられると思っている人は、いのちの本来に

背くので暗い人なのです。

一方、悪人の家庭は、みんな自分のことを悪人だと自覚していますから、相手を裁くことがあります。自分もどんなに気をつけているつもりでも、どんな事をしてしまうかわからない、と自覚し、罪を認め合いますから「ごめんなさい」となり、「誰でも間違っことはあるよね」と、明るく温かい家庭になります。

「ここという悪人とは「自分の悪に自覚的な人」です。善人とは「自分の悪に無自覚な人」「自分はよい人だ」と思っている人のことです。「悪人」はほんの少しの罪をも自覚し、それを恥じ、痛み、胸をはって生きることはできません。罪とということに敏感なのが悪人です。

いつのまにか身についた善し悪しという知恵を、人間の意志で善悪を超え、善悪を左右できると執われてしまったのです。善を知ったからといって善を全うでき、悪を知ったからといって悪を止められるのでしょうか。

しかし、人間の努力や心だけでは自分は悪人だとの自覚はできないのです。教えに照らされたときだけそうだったと、うなずけるのでしょうか。



# ジャータカ物語

本山に勤めて「ラジオ放送『東本願寺の時間』」を担当していたときに放送された当時の同録テープが出てきました。

声優さんの声を聞きながら、あらためて釈尊ご誕生の意味をご一緒に学んでまいりたいと思いから、ここに再録させていただきます。

ほんじょうたん  
本生譚と漢訳されるお釈迦さま前世において菩薩であった時代に衆生を救った善行を集めた物語です。パーリ語聖典には五七四のジャータカ物語があり、散文と韻文とからなり紀元前三世紀ごろ成立といわれている。その後仏教の伝播に伴って世界各地に伝えられ、『インソップ』や『アラビアン・ナイト』などのペルシヤ・アラビア寓話文学に深い影響を与え、日本でも『今昔物語』『宇治拾遺物語』などの中に散見される。

大谷大学の一楽先生は

「釈尊が生まれる前のことは、「ジャータカ」という物語に膨大なものが残されています。前身譚ぜんしんたんとも言われますが、いろんな物語があります。あるときには鹿の王様だったり、鬼であつたり、いろいろ出てきます。しかし、それが実際にはどうであつたかという詮索よりも、何を伝えようとしているかが大事だと思います。釈尊は人間界だけではなく、ありとあらゆる世界の苦しみ、問題を見尽くしたお方であると表しているのですね。ありとあらゆる世界の苦しみを見通した上で、敢えて人間の世界においてその問題をどう超えていくのかということとを課題として扱われたのが釈尊であると表現しているのです。

『大無量寿経講義―尊者阿難、座より起ち―』文栄堂と教えていただきました。

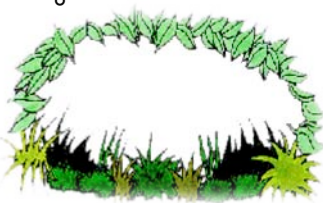


## 鳥さしとウズラ

昔、ブラフマダッタ王がバーラーナシの都で国を治めていたころのことである。

一人の菩薩ぼさつが鶉うずらに生まれ変わって多くの仲間とともに、森の中に住み着いていた。

その近くに一人の鳥射しがいて、鶉を捕らえて暮らしをたてていた。罎おどりの口笛が抜群なので、鶉はどんどんおびき寄せられていく。



ある日、菩薩は仲間たちに向かって訊ねた。  
「このままいけば我々は全滅してしまふ。みんなはそれでもいいのか？」  
重苦しい沈黙が流れる中で一羽が力なく「だけど、どうしようというのです。あの鳥射しの口笛の誘惑、それにあつ

という間に襲い掛かってくる網の目から、逃れる方法があるとでもいうのですか？

「ある」

菩薩はこたえた。

「あるとも、力を合わせることだ

いいか、網が投げられたら、みんな網の目に頭を入れて、力いっぱい羽ばたくのだ。

みんなが力を合わせれば、きっと飛び立つことができる。そして茨の藪に網を捨てよう、そうすれば鳥射しが網を探すのに丸一日はかかるだろう」

わあっ！と、むれの中に明るいざわめきが起こった。

そしてあくる日、鳥射しが網を投げると、鶉たちは力いっぱいそれを持ち上げ、茨の藪にむかって飛んだ。

慌てふためいて、鳥射しは網を追いか

けた。そして、茨の藪から網を離すのにたっぷり日暮れまでかかった

次の日も、また次の日も、鳥射しは鶉の群れに振り回された

ぷりぷりして家に帰ると

「お前さん、今日も

また手ぶらじゃない

か他に持っていく

ところでもできた

んじゃないの！」



妻までが嫌味たっぷりと言う。

「馬鹿いうな！フン、こんなことが長続きするもんか」

「いま、鶉たちは みんな なかよしだ。しかし、そのうちに、けんかをはじめるに ちがいない」

男が 考えたとおり なん日か のちに一羽の鶉が えさを ひろおうとして、ほかの鶉の頭を 踏んでしまった。

踏んだ方の鶉は 「ごめん、ごめん」

と 謝ったが、踏まれた方の鶉は 許さなかった。

「いばるな！自分ひとりで網を持ち上げているわけじゃないぞ」

「なにをー、もついつぺん言ってみろ！」

この様子を見て菩薩は、これでは一族のすべてが滅びると考え、回りの弟子たちを連れて新しい森へ飛び去っていった。

一方、鳥射しは、まだ喧嘩に夢中になっている群れめがけて網を投げ、一羽残らず捕らえて籠につめた。妻の喜ぶ顔が浮かんで、ニヤリと、ほくそ笑んだ。

お釈迦様はこう語り終えられ「争いはすべて滅亡の元である。一族の間で争ってはならない。」

そのときの智恵ある鶉こそ前の世の私であった」と言葉を結ばれた。

# 春期彼岸会

お中日のお昼から、恒例のお彼岸法要をおつとめいたしました。今年は少し寂しくて12名ほどの方のご参詣でした。

お寺にお墓があるという事は、どういう意味があるのでしょうか。亡き人はただ亡くなつていったのではなく、私たちに大きな問いを与えてくださっているのではありませんか。私として生まれたということに、納得と満足と充足した生き方をしたいのではないのですかと。それには教えにふれなければ何が本当のことかわからないまま、一生はあつという間に流れ去つて行きますよ、と身をもつて私たちに示してくださいっているのではないのでしょうか。そうすると本来の意味でのお墓参りとは何かということですが、それは教えを聴聞するということがあつてはじめてお墓参りが成り立つといつていいと思います。年忌法要も彼岸会法要も永代経法要も「法要」といいますね、これは「仏法の要」ということです。「法」とは道理、真理ということ

で「シ」に「去る」と書きます。水は「高いところから低い方へ流れ去る」というどんな時代、民族、どんな地域でも、皆が「そうだ」と頷くことができる道理を法というのです。

仏法を要とするとは、仏法にふれる、仏の願いにふれるということです。私の願ひ、つまり思いに振り回されて、我が思いのとおりになることをひたすら求めて「あーあ、こんなはずじゃなかった」と真実に目をそらして生きていることを「流転」といいますが、仏の願ひを聞くということ、自分を言い当てた言葉に出遇うということ、仏教を学ぶということとは、決して難しい教理を憶えることではないのです。

親鸞聖人の明らかにされた本願念仏の教えは、思い通りにならない人生でも、どんな境遇になつたとしても、自分が誰にも代わるることのない自分として生きていく道があるよと教えてくださるのです。彼岸とは浄土です。私たちの生き方は「穢

土」であり「此岸」です。穢土だからこそ清浄な浄土を願うことが起こるので。その浄土の世界にふれさせていただく仏法聴聞の期間の一つが「お彼岸」です。浄土は死後の世界ではなく、今、ここに生きている、ほかでもないこの「私」を引き受けて生きてゆく意欲を与えてくださるはたらきをいうのです。

悩みのない人などいません。その苦悩が真実に遇う、仏の願ひを聞く接点になるのです。苦悩が転ぜられて行く道を、亡き方縁としていただき、私も安心してどうしようと人生を歩んでいける道を仏法によっていただいでいくのでしよう。決して苦悩がなくなつて救われるのではありません。ここにお念仏のダイナミ





ツクな転換があるのです。

多くの方がご懇志をおはこびくださいました。千葉の田野さんは丹精された野菜を朝一番でお持ちくださいました。皆さま、ありがとうございます。

## 木々愛(こころ)



通称となり、精神の意味と進んだ。【広辞苑】  
で、縁あって作られているワインスタンドです。

一見不思議

な写真ですが、これはご門徒の長吉愛子さんが社長をとめる「木々愛」(禽獣などの臓腑の姿を見てこるへ凝る)またはココルと言ったのが語源。転じて、人間の内臓の

山崎さんという材木商の方が、廃材を使つてご自身の息子さんも通っている、

障害者の自立支援のために作成されたのが、意外な反響で廃材が底をついたのと、協力してくれる加工場がなくなつたところ、たまたま紹介されたご縁から、一緒にアイディアを出しながら、現在のようなスタンドができあがりましたと、お寺に持つてきて下さいました。

その頃、長吉さんもご主人が末期ガンと診断され、自宅、会社、病院をかけずり回る日々を送つておられました。一時的に抗ガン剤が効いて社員の方々と花見を楽しまれ、少し余裕ができたからか、それまで、孔らしきものがあいた木片としか認識できなかったものが、見事なフランスでワインを支えている姿が目飛び込んできたと言います。

再度入院されたご主人と「もつと一目でこの素晴らしさが伝わる製品を作りたい」と苦しい治療を受けながら、試作を繰り返し返されました。一番の難点はワインを指す孔を斜めに開けなければならぬことでした。一時退院されたご主人が、まるで最後のいのちの炎を燃やされるよ

うに、従来の穿孔機でも斜めの孔加工ができるよう改造されたのです。

「あと一ヶ月といわれたのちが、医者も奇跡だと驚くほど灯り続けた二年十ヶ月は、このワインスタンドを世に送り出すために、主人に与えられた時間だったのだ」と愛子さんは受けとめられました。

悪戦苦闘の日々でしたが、ユニークなデザインが二つ生まれました。ボトルを指す孔のあるアングルから見るとはハート型に見えることです。また、パープルハートと呼ばれる南米産のワインレッドの色合いが美しい珍しい樹種を使っていることです。

これらは「モンココル」「トンココル」と命名され、それぞれ「私のハート」「あなたのハート」という意味だそうです。廃材の再利用、そして障害を持つ方への支援ともなるこのスタンドを、大切な方へのプレゼントにお使いいただきたくとお話ししていただきました。

## 光明土・海一味



西光寺の秘密第二弾!?

今回の表紙は本山・東本願寺の御影堂門と門前の噴水です。

といってもこれは陶額でそれを写真に撮ったものです。本物は玄関を入れて突き当たり、本堂の前に掲げています。

実はこの陶額はもとから西光寺にあったものではなく、8年ほど前にいただいたものです。

坊守の実家は、いまから400年前、本願寺が徳川家康の時、東西に分けられたときから、代々東本願寺のお齋(寺院でだされる食事)を作る「八百喜」という仕出し屋で、義父で13代目でした。

いまでこそ、京都の町中や東京でもそれなりの料理を出すお店はありますが、八百喜は本願寺第12世の教如上人のときからご門首一族のおせちをはじめ(私も歴代の門首がいただいたという白味噌のお雑煮を食べさせてもらいました)、もつとも大切な仏事である本山の報恩講の何千人分ものお齋を、各地のお講(仏法を聴聞する人の集まり)から「ほんこさん」の為に丹精され、届けられた極上の蓮根、子芋、大根等の材料を使い、また胡麻をすり鉢で丹念にあたつて作る胡麻豆腐などを法要に合わせて用意するのです。

時代がすぎると近所の旅館やお茶席への仕出し、本山に納骨をされる方へのお齋を作つて参りました。

残念ながら時代の変化から取り残されたような形で、父も体調が優れず、十年ほど前に廃業いたしました。永年の貢献により宗務総長から感謝状をいただき、そのときの記念品がこの陶額なのです。

話は変わりますが、現在皆さまからのご懇志でご修復が進んでいます。江戸時代に四度消失した関係から、明治時代

の再建の時、消火ということに心を配りまして、琵琶湖から直接「本願寺水道」を引いているのです。水運で有名なインクラインがあり、京都市は水力発電所を蹴上につくり(日本で最初の市電はこの電力による)、皆さんもドラマでよく目にする、南禅寺境内の煉瓦造りの疎水の水路は本願寺水道でもあるのです。この絵では噴水の勢いはあまり描かれていませんが、これは琵琶湖水面との落差を利用して作られたと聞いたことがあります。また、南北76㍎、東西58㍎、高さ38㍎という世界最大の木造建築物である御影堂等の諸殿の屋根には、当時最新鋭のフランス製の水道管が張り巡らされ、そこから水を放出して、類焼を防ぐ工夫が成されています。

昨今人気の本山別邸の枳殻邸(家光寄進による石川丈山作庭の名勝。暴れん坊將軍等のロケでも有名)の水路も本願寺水道なのです。

私たちの先祖は、明治の建築の時、最新の技術を駆使して、壮大・荘厳の度を深めて、親鸞聖人の御真影を中心とした根本道場として再建されたのです。